# 2018年
# 地球のしごと
# 教養学部
## 詳細

地球のしごと大學

## オリエンテーション

自己紹介と教養学部オリエンテーション

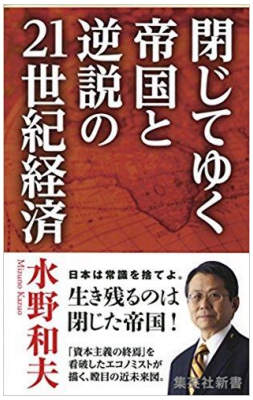
開催日：2018年4月15日（日）

課題書籍：『閉じてゆく帝国と逆説の21世紀経済』

『里山資本主義　日本経済は安心の原理で動く』

受講生全員による自己紹介と課題書籍の感想共有を行います。

受講生には事前に1枚のマイストーリーシートを記入いただきます。



**ファシリテーター：高浜　大介**

株式会社アースカラー／地球のしごと大學　代表。農業生産法人「地球のしごと農園」代表。
1979年生まれ。東京都墨田区出身。千葉県佐倉市在住。立教大学観光学部観光学科卒。大手国際物流企業勤務、企業人事・教育ベンチャー勤務を経て、持続可能な地域（大地）と共生する職業人「アースカラー」の育成・輩出事業を2010年から開始。地球のしごと大學の受講者は延べ300人以上。自らも千葉県佐倉市の里山に居住し、約1町歩の田畑にて企業研修・体験型農場を運営、無農薬・無化学肥料のお米作りや大豆作りも行っている。

【1】＜水資源＞

## 流域経済圏と水資源　～命の源流、水マネジメント～

開催日：2018年4月15日(日)

課題書籍：　『日本の地下水が危ない』

人間の暮らし全てに共通して不可欠な要素、それは「水」です。日本は奇跡的に水資源が豊富と言われており、水のリスクを日常的に感じる機会はほとんどありません。しかし世界を見渡せば、中国やオーストラリアなど水資源が死活問題になっている国も少なくありません。水に困らない国は珍しいのです。しかしながら「外国人が過疎地の山を買いあさっている」「地下水量に変化がみられる」など、日本人の水資源も安泰では決してありません。
本講座では人間に必要な水資源の循環にフォーカスし、流域経済圏(※)や、地球規模で枯渇を始めている地下水に関しての知識や資源管理のリスクについて学びます。生命の源となる水循環を起点に、流域単位で経済と環境保全の両立を図る水資源の扱い方を考え、議論します。

(※)流域経済圏とは、分水嶺から沿岸までの河川の流域圏における経済的なつながりの単位を表す。場合によっては複数の行政区域にまたがる。本来、一つの流域圏は，上流の山村から下流の漁村まで相互に連関しあい、社会，経済的に強いきずなを保有する。古来より人類は大きな河川を中心に集落を形成してきたことからも流域経済圏の考え方はとても重要である。環境循環型社会は流域経済圏内での循環からスタートすべきである。

**講師：橋本　淳司さん**

水ジャーナリスト／アクア・コミュニケーター／アクアスフィア代表／週刊「水」ニュース・レポート発行人／NPO法人 WaterAid Japan理事／NPO法人 地域水道支援センター理事／NPO法人 日本水フォーラム節水リーダー／武蔵野大学非常勤講師。愛知県立芸術大学非常勤講師 。学習院大学文学部卒業後、出版社（日本実業出版社、ベストセラーズ）で書籍編集の仕事に携わった後、ジャーナリストとして独立。水の課題を抱える現場、その解決方法を調査し、さまざまなメディアで情報発信しています。

独自に、「週刊「水」ニュース・レポート」を発行し、地球の水環境の現状や世界・日本各地の新しい動き、水問題に関する考え方や知見を提供しています。また、「水」という視点から持続可能な地域社会づくりのサポートをしようと、アクアスフィアを立ち上げました。アクア・コミュニケーターとして「伝える」×「つなげる」×「育む」活動を通じて、地域の水課題の解決を図っています。

【2】＜衣服と服飾＞

## 消費社会とファストファッションの闇　～映画「トゥルーコスト」～

開催日：2018年4月28日(土)

課題書籍：『脱資本主義宣言』

映画トゥルーコストとは・・・
私たちが着る服や衣服をつくる人々、そしてアパレル産業が世界に与える影響を考えさせる物語です。消費社会の貪欲さと恐怖、そして権力と貧困の物語でもあり、全世界へと広がっている複雑な問題だが、私たちが普段身に着けている服についてのシンプルな物語でもある。この数十年、服の価格が低下する一方で、人や環境が支払う代償は劇的に上昇してきた。服を巡る知られざるストーリーに光を当て、「服に対して本当のコストを支払っているのは誰か？」という問題を提起する、華やかなファッション業界の裏側の知られざる真実に焦点を当てたドキュメンタリー映画。
本講座では、映画トゥルーコストを鑑賞し、現代消費社会の抱える闇について考えます。

**ファシリテーター：高浜　大介**

株式会社アースカラー／地球のしごと大學　代表。
農業生産法人「地球のしごと農園」代表。
1979年生まれ。東京都墨田区出身。千葉県佐倉市在住。立教大学観光学部観光学科卒。大手国際物流企業勤務、企業人事・教育ベンチャー勤務を経て、持続可能な地域（大地）と共生する職業人「アースカラー」の育成・輩出事業を2010年から開始。地球のしごと大學の受講者は延べ300人以上。自らも千葉県佐倉市の里山に居住し、約1町歩の田畑にて企業研修・体験型農場を運営、無農薬・無化学肥料のお米作りや大豆作りも行っている。

【3】＜飲食＞　現地視察：鳥取県智頭町

## 発酵する経済　～パン屋が見つけた腐る経済～

開催日：2018年5月12日(土)

課題書籍：『田舎のパン屋が見た腐る経済』

資本主義における利潤とは、資本家が「労働力」という商品を購入し、付加価値を載せて商品・サービスとして販売することで生まれます。『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（マックス・ウェーバー）に詳しいように、利潤の追求における正義こそ、地球を物質的に豊かにした源です。しかし現代では、資本主義が世界を駆け巡り、開拓すべきフロンティアが無くなりました。今、システムに新たな改革が求められています。
講師の渡邉格さんは「利潤を出さないこと」を経営理念とした、パン屋タルマーリーを営んでおり、従来の資本主義に則った経営ではない新しい自営業の在り方、仕事の在り方を提唱しています。本講座では、タルマーリの現場も視察させていただきながら、資本主義システムを変革するヒントとなる経営を学びましょう。

**講師：渡邊　格さん**
タルマーリー　オーナーシェフ
1971年東京都東大和市出身。23歳で学者の父とハンガリーに滞在。食と農に興味を持ち、25歳で千葉大学園芸学部に入学。「有機農業と地域通貨」をテーマに卒論を書く。新卒で農産物流通会社に就職するも、 31歳でパン職人の道へ。渡邉格ならではのパンづくりを追求し、麹菌採取の道で目覚める。著書に『田舎のパン屋が見つけた「腐る」経済』（講談社）。同書翻訳本が韓国でベストセラーに。台湾、中国でも翻訳され、国内外で講演活動も行っている。

【4】 ＜地方創生＞　現地視察：島根県益田市

## 田園回帰１%戦略　～地方消滅論を覆す田園回帰戦略と所得取戻し戦略～

開催日：2018年5月13日(日)

課題書籍：『田園回帰1%戦略: 地元に人と仕事を取り戻す』

増田レポートが届けた地方消滅論が衝撃を与えるなか、「過疎」発祥の地・島根県の正反対のデータが注目されています。県の大半を占める中山間地域の3割以上のエリアで、この5年の間に4歳以下の子供が増えています。とくに離島や山間部といった「田舎の田舎」で、若い世代のUターン、Iターンが目立つ。このような「田園回帰」を全国へと広げていく「ビジョン」と「戦略」を、循環型社会への進化を展望し、大胆に提案しているのが藤山浩さんの「田園回帰１%戦略」です。
本講座では「田園回帰１%戦略」や「所得１%取り戻し戦略」について理解し、過疎農山漁村の再生を考え、議論します。

**講師：藤山　浩さん**
一般社団法人　持続可能な地域社会総合研究所　所長
1959年島根県生まれ。一橋大学経済学部卒。
高校教諭などを経て、 98年から島根県中山間地域研究センター研究統括監を務めた後、2017年「持続可能な地域社会総合研究所」を設立。国の有識者委員会にも数多く参加し、著者に「田園回帰１%戦略地元に人と仕事を取り戻す」など多数。
NHK

【5】 ＜幼児保育＞　現地視察：島根県益田市

## 里山保育　～福祉と地域商社が支える森のようちえん～

開催日：2018年5月14日(月)

「森のようちえん」とは、森1950年代中頃にデンマークで「子供たちに幼い頃から自然と触れ合う機会を与え、自然の中でのびのびと遊ばせたい」という願いを持つ一人の母親が、自分の子供たちを連れて毎日森に出かけたのが始まりといわれています。
その後、北欧を中心に日本でも10年前頃から少しずつ広がってきました。日本の「森のようちえん」は、フィールド、園舎の有無、活動の頻度、活動主体などが様々で、幼児の野外活動を総称しています。子供の自主性を尊重した「見守る保育」も大きな特徴です。
本講座では、島根県益田市真砂地区の公民館が中心となる里山保育を視察しお話を伺います。地域の農家さんの野菜を使った食事や、高齢者の見回りも兼ねた「幼老連携福祉」や「まさごの豆腐」など地域商社も関わりを持っている真砂の「森のようちえん」から学びましょう。

**講師：大庭　完（おおば　ゆたか）さん**

益田市真砂地区振興センター長／公民館長
地域自治組織「ときめきの里　真砂」会長

東京・益田市内でのゼネコン時代を経て、H19年、妻の実家である真砂地区の公民館長に就任。H23年より、公民館・地域商社・学校との連携による「食と農」をテーマとした地域づくりを推進するひとり。都心からのJターン、かつ一般企業での経験により培った広い視野と経済的視点で、社会教育をベースに、小さくとも継続的な経済活動のしくみづくりを考案。子どもから高齢者まで、誰もが安心して暮らせる地域をめざし挑戦し続けている。

【6】 ＜地方自治＞ 現地視察：静岡県熱海市

## 地方自治体の仕組み　～基礎自治体の意思決定メカニズム～

開催日：2018年5月26日(土)

自分の暮らす地域の「地方創生」を成功させたいならば、地方自治体との協働・協力関係は必須です。現在、政府（国）から地方創生関連予算として地方自治体へ潤沢な資金が投下され続けています。私たち市民の支払う税金は、農山漁村の自立していく未来のために効果的に活用されねばなりません。
そのためには、地方自治体の思考様式、行動メカニズムを理解することが、民間と行政の協働をスムーズにしていくために大事なこととなります。本講座では、静岡県熱海市を訪問し、副市長とともに熱海市のリアルな地方創生総合戦略を題材に、具体的な予算企画の考え方、政策実装の流れと政策実行の現場での課題やあり方について学びます。

**講師：森本　要さん**

熱海市副市長。1979年生まれ。2003年経済産業省入省。
中小企業庁や資源エネルギー庁などを経て、地方自治の
現場経験を希望し、2015年7月より現職。

【7】 ＜リノベーション＞　現地視察：静岡県熱海市

## リノベーションまちづくり　～熱海市での遊休不動産活用と地域おこし～

開催日：2018年5月27日(日)

課題書籍：『稼ぐまちが地方を変える 誰も言わなかった10の鉄則』

リノベーションまちづくりとは、空きビルなどの遊休化した不動産という空間資源と、潜在的な地域資源を活用して、都市・地域経営課題を複合的に解決していくまちづくりです。それらの手法を形式知化した学びの場「リノベーションスクール」が日本全国で開催され、人気を博しています。空き家はまちの宝物。空き家の新しい使いかたを皆で考えて、皆で楽しく使って、まちを元気にする。民間経営による不動産の再生こそまちを活性化させます。
本講座では、熱海市でのゲストハウス「MARUYA」経営を通じて地域再生を行っている市来氏に学びます。前日は「MARUYA」に宿泊します。

**講師：市来　広一郎さん**

NPO法人atamista代表理事／株式会社machimori代表取締役
一般社団法人ジャパンオンパク 理事／一般社団法人日本まちやど協会 理事／一般社団法人熱海市観光協会 理事
1979年静岡県熱海生まれ、熱海育ち。東京都立大学大学院理学研究科（物理学）修了後、アジア・ヨーロッパを3カ月、一人で放浪。その後、ビジネスコンサルティング会社に勤務。2007年に熱海にUターンし、ゼロから地域づくりに取り組み始める。遊休農地の再生のための活動、「チーム里庭」、地域資源を活用した体験交流ツアーを集めた、「熱海温泉玉手箱（オンたま）」を熱海市観光協会、熱海市などと協働で開始、プロデュース。2011年、衰退した熱海の中心市街地をリノベーションする民間まちづくり会社、株式会社machimoriを設立。いずれも空き店舗を再生し、カフェ「CAFERoCA」を、宿泊施設「guest houseMARUYA」、コワーキングスペース「naedoco」をオープンし運営している。熱海市と共に創業支援プログラム99℃～Startup Program for ATAMI2030～や、熱海市の2030年の未来を構想する「ATAMI2030会議」を開催している。

【8】 ＜地域医療＞　現地視察：静岡県朝霧高原

## 現代西洋医学と代替医療を合わせた「統合医療」
## ～静岡県朝霧高原、地域医療の現場から～

開催日：2018年6月2日、3日(土・日)

課題書籍：『自然欠乏症候群～体と心のその「つらさ」、自然不足が原因です～』

代替医療とは、現代西洋医療の領域外の医学・医療体系を総称したものです。東洋医学（漢方、鍼灸など）全般のほか、食養生、プロバイオティクス、呼吸法、太極拳、波動医学、その他アーユルヴェーダやユナニ医学などの伝統医学からニューサイエンスと呼ばれている医療としてはまだ認知されていない現代科学的最先端医学まで、幅広い医療分野を指します。そして、代替医療のみならず、現代西洋医学も含めて実践する医療が統合医療。症状だけではなく、その人の性格や暮らしなども含めて診断することから、全人的な医療、ホリスティック医学と呼ばれることもあります。統合医療の基本は、ひとりひとりの患者に対し、様々な方面から診ることで多面的に捉え、最適な医療をコーディネートすることにあります。また、医療へのアクセスも重要です。住んでいる地域に、最良の医療があることが、理想的かつ自然な医療のかたちです。
講師は、朝霧高原診療所の院長先生である山本竜隆さん。過疎化・高齢化により僻地に医療が届かなくなっている中で、地域医療とインバウンドと絡めた養生医療の両輪で、医療の問題に取り組んでいます。そのご活動を踏まえて、経験的事実として利用される代替医療・自然療法と近代西洋医学とを合わせた統合医療の可能性、地域医療の在り方について考え議論します。

**講師：山本　竜隆さん**

●朝霧高原診療所 院長
●WELLNESS UNION（富士山静養園・日月倶楽部）代表
●昭和大学医学部非常勤講師・聖マリアンナ医科大学非常勤講師

聖マリアンナ医科大学、昭和大学医学部大学院卒業。
アンドルー・ワイルが主催する米国アリゾナ大学医学部統合医療プログラムAssociate Fellow（2000年～2002年）をアジアで初めて修了。その後、統合医療ビレッジグループ総院長（東京・四谷）、JA中伊豆温泉病院内科医長、（株）小糸製作所静岡工場診療所所長・産業医などを経て現職。
20000坪を有する滞在施設「日月倶楽部」では「富士山静養園」と共にヨガや瞑想などのマインドフルネスや、企業の健康管理者への指導プログラムなどを提供している。

【9】 ＜民俗思想＞

## 農山漁村精神
## ～民衆精神が創り出す「温かい貨幣」の行きかう半市場経済～

開催日：2018年6月10日(日)

課題書籍：『半市場経済：成長だけでない「共創社会」の時代』『怯えの時代』

「半市場経済」とは「経済の展開と社会の創造が一体化しうる経済のかたち」であり「経済が経済以外のものと結びついて展開するかたち」であると内山節氏は定義しています。利益が第一優先の資本主義、完全市場経済では、これ以上の幸せを創造できない。そのためには日本の農山漁村が空気のように保有していた精神や思想ではないだろうか。
本講座では、日本の農山漁村での仕事や労働に対する民衆の精神、価値観を紐解きつつ、「おすそ分け」の贈与経済から、ソーシャルビジネスまで、私たちが未来に求めるべき仕事のありようとその精神について考えます。現代民俗哲学の巨匠と言える内山節氏とたっぷり時間を割いた議論形式にて進めます。

**講師：内山　節さん**

哲学者　立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科教授（2015年定年にて退任）。特定非営利活動法人森づくりフォーラム代表理事。
1950年、東京生まれ。1970年代から東京と群馬県上野村の二地域を往復する生活を営み、自ら畑を耕し、里山に囲まれた農村の暮らしを通して、自然と労働の思想を問い続ける実践的な哲学者として知られている。自然論・労働論・共同体論などを専門とし、立教大学大学院教授、東京大学講師などを歴任。東北農家の会、九州農家の会などでも講師を務める。主な著書に「ローカリズム原論」「文明の災禍」「共同体基礎理論」「清浄なる精神」「里という思想」「自然と労働」「日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか」などがある。

【10】 <農業> 現地視察：千葉県佐倉市

## 循環型農業で身体性を取り戻そう～無農薬無化学肥料での米作り体験～

開催日：2018年6月24日(日)9:30~16:00

課題書籍： 『日本農業再生論 「自然栽培」革命で日本は世界一になる!』
『アニ眼と虫眼』『遺言』

地球のしごと大學主催の高浜が運営する「地球のしごと農園」では、無農薬・無化学肥料でのお米作りを通して、ホタルが舞い飛ぶような環境づくりをしています。企業の農業体験の場であったり、市民農園としてのｍｙ田んぼ、ｍｙ大豆畑などを運営しています。
本講座では、無農薬でのお米作りを体感するために、初夏の水田草取り作業を体験します。約3時間の草取り作業はなかなか大変です。午後は、自然栽培、有機栽培など無農薬での農業ビジネスの現状を皆さんにお伝えし、その他ハイテク農業なども含めた農業界を展望します。一緒に汗を流しながら農業への理解を深めましょう。

**講師：高浜　大介**

株式会社アースカラー／地球のしごと大學　代表。　農業生産法人「地球のしごと農園」代表。

1979年生まれ。東京都墨田区出身。千葉県佐倉市在住。立教大学観光学部観光学科卒。大手国際物流企業勤務、企業人事・教育ベンチャー勤務を経て、持続可能な地域（大地）と共生する職業人「アースカラー」の育成・輩出事業を2010年から開始。地球のしごと大學の受講者は延べ300人以上。自らも千葉県佐倉市の里山に居住し、約1町歩の田畑にて企業研修・体験型農場を運営、無農薬・無化学肥料のお米作りや大豆作りも行っている。

【11】 <食と伝統>

## 伝統食の再考　～日本食の可能性　千年の一滴だし・しょうゆ～

開催日時：2018年7月1日(日) 9:30~12:30

課題書籍： 『粗食のすすめ 』 『発酵文化人類学 微生物から見た社会のカタチ 』

戦後、半世紀ほどで食の欧米化が進み、お米の消費量も激減。日本人の食生活は大きく変わりました。しかし、本来の食生活のあり方とは、それぞれの時期にそれぞれの土地でとれる食べものを、その土地にあった調理法で食べることです。日本人は昔から、お米を主食に、味噌などの発酵食品、旬の野菜や近海でとれる小魚などをおかずとして、食事を取っていました。本講座では、映画「千年の一滴」を視聴し、なぜ、和食を中心とした、日本の気候風土に合った伝統食が素晴らしいのか（理にかなっているのか）どのような食生活を子どもたちに継承していくべきか、日常の食事が農業や環境、食文化にどのような影響を及ぼすかなどを考え、再興していくべき食生活について議論します。

**映画情報：千年の一滴　だし・しょうゆ**

【2014年、日本・フランス合作 100分（50分 + 50分）】
日本人と自然との関係を、食を切り口に見つめるドキュメンタリー映画。第一章は、日本の味の基本「だし」。これは仏教の肉食禁止令のもと、肉に代わる“うまみ”を探し求めた人々が、およそ千年かけて、雄大な自然から見つけたものでした。 最新の食品科学は「だし」が健康によく、理にかなっていることを明らかにしています。 漁師・農家・禅寺・料亭・科学者―。「だし」をめぐる人々の営みを追い、大自然から“うまみ”のエッセンスを取り出してきた日本人の知恵を描きます。
第二章は、「しょうゆ：ミクロの世界との対話」和食の“うまみ”がつまった調味料（しょうゆ・さけ・みりん・みそ）は、1種類のカビ（麹カビ）によって作られます。特撮を駆使したミクロの映像で、千年にわたって磨かれた職人たちの知恵と、麹カビによる和食創世のドラマを浮かび上がらせます。（公式HPより抜粋加筆）

【12】 <食と漁業>

## 魚食の再考　～近海で取れる魚介と海藻、未利用魚の調理レクチャー～

開催日時：2018年7月1日(日)13:30~17:00

課題書籍：『魚が食べられなくなる日』

古来より海に囲まれ、多くの島々と長い沿岸と広い海を持つ日本では海からとれる魚介類は貴重なタンパク源や田畑の肥料として利用されてきました。日本近海には現在およそ３３００種の魚介類が生息しているとみられ、このうち、主に２５７種が食用に利用されていると推定されます。古くから漁獲量、品質が時期や産地によって大きく変動する海の恵みをその時の自然状態に合わせる形で、有効利用することによって、その土地、その土地で特有の魚食文化が育まれてきました。

しかし、食習慣の変化によって魚介類と肉類の消費量が逆転するなど、それまで親しまれて継続されてきた様々な魚食の習慣が衰退しはじめ、消費される魚介類にも大きな偏りが見られるようになってきました。日本漁業の問題点は、マグロやサバなどメジャーな種類の魚の資源問題ではなく、近海で取れるマイナーな魚の活用にあるのです！

健康な食生活への関心が高まってきている現在、魚食の文化と習慣は世界的にも注目が集まってきています。本講座は、講座は水産資源の持続的利用と衰退してきている人と魚と海の関係の再構築を目指す団体、アクアカルチャーさんを招いて、日本近海の漁業と魚食の展望を学び、魚の捌き方レクチャーを受けます。捌き方をマスターすれば、魚食を日常的に食卓に取り入れることができます。

**講師：アクアカルチャー（山本　浩司さん）**

水産資源の持続的利用と衰退してきている人と魚と海の関係の再構築を目指し、魚の捌き方教室やお魚探検隊イベントなど魚に関する活動を行う。

＜ 活動趣旨 ＞（公式HPより）
海に囲まれる日本。海には多大なる可能性があります。
海に行き、足下を見れば小さな海の生物たちの生態系が息づいています。
船で沖にくりだせば、さらにダイナミックな生物たちが生息しています。
我々メンバーは日常で海や魚に触れる事はもちろん、なによりそれらを愛しています。
食べる事により環境を考え、環境を考えることで生き物を考え、生き物を考えることで食べることを考え…
環境、生き物、魚食は相互作用しあい、切っても切れない関係なのです。
見て良し、触れて良し、考えて良し、食べて良し。
「見る」・「触る」・「聞く」・「嗅ぐ」・「味わう」の五感を使い「考える」ことを通し、魚を楽しんでいただきたいのです。
海は魅力に満ちあふれています。
私たち「AquaCulture」はそんな海やそこに活きる海洋生物の魅力を体感・共有し、人と自然の繋がりを伝える為、様々な場所で活動・発信しています。

【13】 <ツーリズム>　現地視察：岐阜県飛騨古川町

## 里山インバウンドツーリズム　～暮らしを旅する里山サイクリング～

開催日時：2018年7月14日(土)

課題書籍：『外国人が熱狂するクールな田舎の作り方』

日本は「観光立国の実現」を21世紀の主要政策として掲げています。しかしこれまでのような開発型の観光では投資が莫大であったり、主に都会にある旅行会社主体の発地型観光では、地域に落ちるお金は限定的です。これからは、受け入れ側が主体となる着地型観光、そしてハコモノを作るのではなく、在りのままの暮らしや文化、自然環境を、負荷をかけずに見聞・体験してもらうツーリズムの確立が必要です。

あるべき観光（ツーリズム）のかたちとは何か？
岐阜県飛騨古川で活躍されている、株式会社美ら地球（ちゅらぼし）さんの話からツーリズムの現状と課題を把握し、ツーリズム（観光）の未来について考え、議論しましょう。午前中は飛騨里山サイクリングに参加して株式会社美ら地球の取り組みを肌で感じ、講義と議論の効果を高めます。

**講師：山田　慈芳さん**
**株式会社美ら地球　取締役**

【14】 <祭り> 現地視察：岐阜県郡上市郡上八幡

## 祭りと共同体 ～郡上踊りを体験しよう～

開催日時：2018年7月14日(土)

課題書籍： 『日本の祭り』

日本人にとって祭りとは何でしょうか。春夏秋冬の季節に応じて私たちの祭りはあります。春の訪れとともに豊作を祈願し、夏には台風や害虫、疫病などの被害にあわないことを願い、秋の実りに感謝を捧げ、寒さの厳しい冬には穢れを落とすなど魂を充実させるのが、祭りです。農山漁村では自然に寄り添う人々の営みがあり、日本人の季節感や自然に対する意識は祭りに凝縮されているといって過言ではありません。
本講座では岐阜県郡上市を訪れ、ふるさと郡上会さんのご協力をいただき、郡上踊りに参加し、水の城下町、風光明媚な郡上八幡を散策見学したりと、祭りと観光について考えます。

郡上踊りとは・・・
岐阜県郡上市八幡町（旧・郡上郡八幡町、通称「郡上八幡」）で開催される伝統的な盆踊りである。日本三大盆踊り、日本三大民謡（郡上節）に数えられる。「郡上の八幡出てゆく時は、雨も降らぬに袖しぼる」の歌詞で知られる郡上おどりは約420年の歴史があり、江戸時代に士農工商の人心の安定と融和を図るために奨励され盛んになったと言われている。夏の2ケ月間にわたり約30夜開催する郡上おどりの最大の特徴は、観る踊りではなく参加する踊りというところです。老若男女、地元の人も観光客もいっしょになって踊り、服装は自由ですが、浴衣が基本です。盂蘭盆会の8月13日から16日までの4日間は翌朝まで踊り明かす徹夜おどりで賑わいます。10種類のおどりすべてが国の重要無形民俗文化財に指定されています。（郡上市観光連盟 公式サイトより抜粋）

**ふるさと郡上会**

「ふるさと郡上会」は、都市との交流で郡上を元気にしたい、と平成20年6月に結成された、郡上市交流・移住推進協議会によって運営されています。郡上を愛する市内16団体によって運営されています。岐阜県の真ん中にあるここ郡上市で、わたしたちのふるさとを田舎暮らしや第二の人生を始める方々の「新しいふるさと」にしていたくためのチャレンジをしています。観光客として郡上を訪れただけでは出会えない、魅力あふれる「体験」や「交流」の 機会をいっぱい企画して、あなたに「郡上ファン」になっていただきたいと思っています。

【15】 <食と狩猟> 現地視察：岐阜県郡上市

## 獣害と狩猟 ～中山間でのジビエ六次産業化～

開催日時：2018年7月15日(日)

課題書籍： 『ぼくは猟師になった』

近年、中山間地域を中心に鳥獣被害が深刻な状況にあります。餌となる広葉樹が少なく針葉樹が増えたこと、集落の過疎化・高齢化による人間活動の減少などが主原因とされています。生鳥獣による農作物への被害額はおよそ200億円で、その6割が獣類、4割が鳥類によるものであり、獣類では9割がイノシシ、シカ、サルによるものとされています。また、狩猟者の減少や高齢化も進んでおり、中山間農業は鳥獣被害を止める手立てに苦労しています。本講座では中山間での鳥獣被害について知り、狩猟の現状と課題、ジビエなどの六次産業化について考え、議論します。

**講師：興膳 健太さん**

1982年福岡県生まれ。2009年からNPO法人メタセコイアの森の仲間たちで狩猟免許を3名取得し、猟師の6次産業化に取り組む。現在、岐阜県郡上市において、守り、捕獲できる集落倍増計画を広め、市内の多くの集落で獣害を獣益に変える支援を行っている。平成２５年に農水省の鳥獣被害対策優良活動表彰生産局長賞を受賞。現在は、狩猟サミットや日本猪祭りなど狩猟の魅力を広く伝えていく活動も行っている。

【16】＜衣服と服飾＞　現地視察：岐阜市郡上市石徹白

## 衣服の手仕事　～地域の小商い、石徹白洋品店を通じて～

開催日時：2018年7月16日(祝・月)

課題書籍：『きものという農業』

衣類は本来、自然がもたらしてくれるものです。日本では昔から、栽培や養蚕によって衣服を自給してきました。石徹白洋品店は、こだわりの天然素材を使用し、身に纏う人の体と心、そして自然環境に優しい丁寧なものづくりをしている洋品店です。店主の馨生里さんの取り組み、また、哲学やまなざしから、天然素材の衣服について、また丁寧なものづくり・小商いの極意を学びましょう。

**講師：平野　馨生里さん**

1981年岐阜市生まれ・育ち。慶応義塾大学総合政策学部卒。学生時代にカンボジアで伝統織物を復刻するＮＰＯ（ＩＫＴＴ）にてフィールドワーク。地域に根差した伝統文化の重要性を学ぶ。現在、石徹白で、地域に残る野良着などを復刻した商品開発を展開。一方で、地元のお年寄りにお話を聞き「聞き書き集」を発行するなどの活動も行っている。

【17】＜自然エネルギー＞　現地視察：岐阜市郡上市石徹白

## 小水力発電と地域自治　～自然エネルギーの地域導入～

開催日時：2018年7月16日(祝・月)

課題書籍：『ご当地電力はじめました』

郡上市石徹白地区は、縄文時代から年間1000人が出入りする、霊峰白山への登山口・神社が鎮座する歴史ある集落です。この人口270人の過疎地域が全国的に注目されているのは、農業用水を活用した小水力発電を、地域の総力を挙げて導入しているからです。
2014年住民全戸が出資し農業協同組合を設立、農業用水の一部を活用した小水力発電所を開設しました。そして、2016年に発電を開始、石徹白地区270人110世帯はもちろん、計算上はそのほかに110世帯、計220世帯の電力を賄っています。この小さな水力発電は、地域に人を呼び込む広告塔となっており、農産物加工所が再開し、移住者は増え続け、地域に様々な波及効果をもたらしています。石徹白地区の小水力発電成功の要因を、歴史的背景を紐解きながら解明し、地域自治の在り方を考えてみましょう。

**講師：平野　彰秀さん**

NPO法人地域再生機構　副理事長
1975年生まれ。岐阜市出身。東京大学工学部都市工学科卒、同大学院環境学修士。大学入学より14年間東京で暮らす。 外資系経営コンサルティング会社等を経て、32歳で岐阜市にUターン。 中山間地域の地域づくり活動と、自然エネルギー（小水力発電・木質バイオマス）導入に携わる。 2011年9月、人口270人の集落、岐阜県郡上市白鳥町石徹白（いとしろ）に移住。NPO法人地域再生機構副理事長、石徹白地区地域づくり協議会事務局。

【18】＜教育＞

## 地域教育魅力化プロジェクト　～教育で持続可能な地域を創る～

開催日時：2018年7月29日(日)

課題書籍：　『未来を変えた島の学校：隠岐島前発 ふるさと再興への挑戦』

全国の農山漁村で過疎が進行しています。特に地元の高校が生徒不足により廃校になることは地域にとって大きな痛手となります。地域の若者は中学校を卒業すると自動的に地域外へ進学することとなり、人口流出問題に直結するからです。地域の次世代を担う子供たちに対して、生きる力や健全な郷土愛を育む魅力ある教育を取り戻すことこそ、過疎地域の最重要課題です。
廃校寸前に陥っていた島根県立隠岐島前高校は、今では全国・海外からも志願者が集まる学校へと生まれ変わりました。高校生がまちづくりに挑戦するプロジェクト学習や全国から意志ある多彩な生徒を募集する地方留学など、地域と学校の協働による新たな地域教育の取り組みが島前高校と島前地域を魅力ある学びの場へと変貌させたのです。こうした「教育による持続可能な地域づくり」は島根県全域に広がりを見せ、2016年には日本財団のソーシャルイノベーター最優秀賞を受賞し、日本全国や海外へと展開していく準備が進んでいます。
今回はこの大きな動きの起点となっている岩本悠さんから、学校魅力化の挑戦から学び、地域教育の未来について展望します。

**講師：岩本　悠さん**
一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム　共同代表
島根県教育魅力化特命官
東京都生まれ。学生時代にアジア・アフリカ20ヶ国の地域開発の現場を巡り、その体験学習記『流学日記(文芸社/幻冬舎)』を出版。印税等でアフガニスタンに学校を建設。幼・小・中・高校の教員免許を取得し卒業後は、ソニーで人材育成・組織開発・社会貢献事業等に従事する傍ら、学校・大学における開発教育・キャリア教育に取り組む。2007年より海士町で隠岐島前高校を中心とする人づくりによるまちづくりを実践。「日本を立て直す100人（朝日新聞出版・AERA）」に選出。プロジェクトは第一回プラチナ大賞（総務大臣賞）等を受賞。2015年から島根県教育庁と島根県地域振興部を兼務し、教育開発による地域創生に従事。2016年、特別ソーシャルイノベーター最優秀賞受賞（日本財団）。

【19】＜衣服と服飾＞

## オーガニックコットン　～made in japanの顔が見えるものづくり～

開催日：2018年7月29日（日）

課題書籍：　『ワタが世界を変える：衣の自給について考えよう』

世界中の農薬の20パーセントが綿花栽培に使われています。綿花栽培は大量の水を使うので、世界最大の綿花の産地、アラル海は干上がりました。そのことにより塩害が生じ、その地域に住む人々は甚大な健康被害にあっています。化学繊維もどんどん増えており、化学物質による肌への負担、環境ホルモン・化学繊維・静電気が発生しやすいといったことから様々なアレルギーや病気につながることが懸念されます。過剰な広告、ファッション業界の「計画的陳腐化」計画に乗せられ、流行に流され、日本人は一年間で10キロの洋服を買い、8.5キロを捨てています（2009年）。
厳しい検査基準を満たしたオーガニックコットン、日本の職人の手による顔の見えるものづくりは、このような現代の資本主義の論理のアンチテーゼです。本講義ではアバンティの渡邊智恵子さんに、市場経済の中では難しいオーガニックコットンの事業化、業界動向について伺い、衣服の未来について議論します。

**講師：渡邊　智恵子さん**
1952年 北海道斜里郡出身　1975年 明治大学商学部卒業　1975年 株式会社タスコジャパン入社　1983年 同社　取締役副社長に就任　1985年 株式会社アバンティ設立、代表取締役社長就任　1990年 株式会社タスコジャパンを退社　1993年 Katan House Japan Inc. を設立、代表取締役社長就任　2000年 NPO法人日本オーガニックコットン協会（JOCA）に昇格、副理事長就任　2008年「毎日ファッション大賞」受賞　2009年 経済産業省「日本を代表するソーシャルビジネス55選」に選出　『ウーマン・オブ・ザ・イヤー2010』リーダー部門を受賞、総合７位を受賞　2010年 NHK「プロフェッショナル仕事の流儀」に取り上げられる　2011年 一般社団法人小諸エコビレッジ設立、代表理事就任　2012年 アメリカ・テキサスGold hoe awardを受賞　2014年 一般社団法人わくわくのびのびえこども塾設立、代表理事就任　2016年 ラジオ番組「22世紀に残すもの」パーソナリティとして始動　2016年 一般財団法人森から海へ設立、代表理事就任

【20】＜食と民俗＞ 現地視察：宮崎県椎葉村

## 山間地民俗と世界農業遺産 ～椎葉村の焼き畑農業とそば打ち体験～

開催日時：2018年8月3日・4日(金・土)

課題書籍：『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』

「高千穂郷・椎葉山地域」は、2015年12月15日、その世界農業遺産（※）に国内6地域目として認定されました。険しく平地が少ない山間地において、針葉樹と広葉樹で構成されるモザイク林等による森林保全管理、伝統的な焼畑農業、急斜面に築かれた500km超の水路網を有する棚田の米作りなどの複合的農林業システムと神楽など特色ある伝統文化があることが、認定の理由です。
今回の講義では、その高千穂郷・椎葉山地域に行き、LOHASを日本に広めたことで有名な大和田順子さんにこの世界農業遺産、そして高千穂郷・椎葉山地域についてお話頂きます。また、日本で唯一伝統的な焼畑農業を続けてきた椎葉村の椎葉家の山村にて、年に一度の火入れを見せて頂きます。伝統的な暮らしを守り繋いできた方々を訪問し、そこに住む人々とその地域に残る伝統農法や知恵、地域システム＝「民族」を学びます。また、翌日はそば打ち体験を行い、椎葉の食を楽しみます。
（※）世界農業遺産（英語: Globally Important Agricultural Heritage Systems、GIAHS、ジアス）とは、伝統的な農業と、農業によって育まれ維持されてきた土地利用（農地やため池・水利施設などの灌漑）、技術、文化風習、風景、そしてそれを取り巻く生物多様性の保全を目的に、世界的に重要な地域を国連食糧農業機関（FAO）が認定するものです。2002年に国連食糧農業機関により開始されました。

**講師：大和田　順子さん**

一般社団法人ロハス・ビジネス・アライアンス　共同代表
東急百貨店、東急総合研究所、ザ・ボディショップ等を経て2006年4月に独立。
2002年に日本にＬＯＨＡＳ（ロハス）を紹介。各地の農山村で企業と地域をつなぎ、課題の解決を目指すＣＳＶプロジェクトをデザイン。有機農業や生物多様性を核とした地域づくりに情熱を注ぐ。
一般社団法人ロハス・ビジネス・アライアンス（ＬＢＡ）共同代表、立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科「サステナブル・コミュニティ論」兼任講師、環境カウンセラー／消費生活アドバイザー、農林水産省・世界農業遺産専門家会議委員／総務省、地域資源・事業化支援アドバイザー／JST-RISTEX「持続可能な多世代共創社会のデザイン」領域アドバイザーなど務める。
主な著書：『ロハスビジネス』（2008年、朝日新書）
『アグリ・コミュニティビジネス』（2011年、学芸出版社）他

【21】＜地方自治＞　現地視察：宮崎県諸塚村

## 地域住民自治　～宮崎県諸塚村「自治公民館制」を通して考える～

開催日時：2018年8月5日（日）

諸塚村は、戦前から地域での社会教育が盛んであり、終戦後GHQによる地場組織解体命令に屈せずに、戦前の集落ごとの民主団体を「自治公民館」として置き換える提案をGHQに行い、自治公民館制度の許可を勝ち取りました。今では16の公民館で壮年部・婦人部などが組織され集落を束ねています。その連絡協議会長は自治組織の長であり、村長と対等な立場にあります。
本講座では、地域住民による自治とは何か？行政による統治とは何が異なるのか？実際に集落の共同作業にも参加して、諸塚村の誇りある取り組みから学びます。

**講師：矢房　孝広さん**

諸塚村役場
企画課長　兼　地方創生担当課長

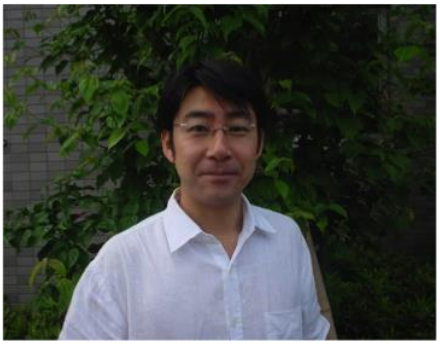
【22】＜建築＞　現地視察：神奈川県藤野町

**「住まい」の再興　～風土に根差した伝統的日本家屋の良さとは～**

開催日時：2018年8月25日（日）

課題書籍：『里山長屋をたのしむ：エコロジカルにシェアする暮らし』『無添加住宅：化学物質を使わない、世界でいちばん自然に近い家』

伝統的な家屋には、半分外の部分（縁側や土間等）があり、家屋の外と緩やかに繋がっています。気候風土との関わり、自然との応答の中で培われた技術と知恵によって造られ、その土地でとれる材料、地域の資源や技術を使う「地産地消」が基本で、それが地域ごとに特色ある風景を生み出してきました。日本の伝統的な住まいづくりには、驚くべき技術と知恵が詰まっています。しかし、現代では、産業としての住まいづくりが先行し、廃棄物やシックハウス、海外の森林破壊などの問題が起きています。
これからは、環境に負荷をかけない家、日本の森林を活かす家、日本の伝統技術を継承する家、セルフビルドによって手間をかける家、パッシブ技術や再生可能エネルギーなどを利用した自立する家、地域の信頼関係や地域経済への寄与などに配慮した家などを、目指す必要があります。
現代技術と日本の伝統家屋の良さを融合した家屋を自ら設計し、住まわれている講師の山田さん宅に伺い、議論します。



**講師：山田　貴宏さん**

一級建築士事務所　ビオフォルム環境デザイン室 代表

1966年生まれ、千葉県佐倉市出身。早稲田大学建築学科都市環境工学専攻修了。清水建設株式会社、一級建築士事務所 長谷川敬アトリエに勤めたのち、2005年に一級建築士事務所 ビオフォルム環境デザイン室を設立。主に国産材と自然素材を活用し、地産地消でかつ伝統的な木の家造りを中心とした建築/環境設計を行う。パーマカルチャーのデザイン手法・哲学を背景とした住環境づくりをめざす。建物とそれを取り巻く自然まで含めた幅広い環境と場づくりがテーマ。

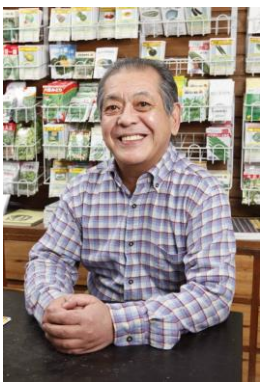
【23】＜農業＞

**固定種・在来種のタネ　～タネを守ることは、命を繋ぐこと～**

開催日時：2018年9月2日(日)

課題書籍：『タネが危ない』

昔から農民は、種を撒き、野菜を育て、種を取って、翌年にまたその種を撒く、というサイクルを繰り返してきました。これを自家採取種と言います。そうして採られた種は、その土地の気候風土やその土地で遭遇する病害虫対策に合った（順化した）、固定種の地方野菜となります。種は国外から、または日本の中で伝播し、伝播した先で育てられ、自家採取されることで、その土地に固有の種として根付いていきました。
しかし、高度経済成長期以降、日本中の種が、形質が均一で雑種強勢が働く（系統が遠く離れた雑種の一代目は、生育が早まったり、収量が総代したりする）一代雑種（F1）に代わってしまいました。大量生産・大量消費社会の中で、規格が揃っていた方が、経済効率性が高いのです。また、最近では雄性不稔という技術が使われ、機能性農作物などという野菜まで出てきました。これらの技術はいったい何なのでしょうか。
種が無ければ、作物は作れません。まさに「種を守ることは、生命を繋ぐこと」です。国内唯一、固定種の種のみを扱う種苗店三代目主人野口勲さんから、F1技術が抱えるリスク、自家採取をして伝統野菜を守り育てる大切さを学びましょう。



**講師：野口　勲さん**

タネ屋の三代目。73才。埼玉県飯能市の野口のタネ/野口種苗研究所代表。
店を継ぐ前は、虫プロダクション出版部員として、故手塚治虫氏の代表作『火の鳥』の初代担当編集者だった。（30歳を契機に現職）
食糧生産の源である種子が、限られた企業に独占される状況に危機感を持ち、F1種子やGMO種子の危険性や、固定種による自家採種の大切さを訴えている。
著書に『タネが危ない』（日経新聞出版社）、『いのちの種を未来に』、『固定種野菜の種と育て方』（ともに創森社）などがある。

【24】＜酪農＞　現地視察：岩手県岩泉町

## 牛舎の無い牧場　～２４時間３６５日放牧「中洞牧場」～

開催日時：2018年9月16日(日)

課題書籍：　『幸せな牛からおいしい牛乳』

広い放牧地に解放され、自由に草を食べ、狂牛病とは無縁の牛たち。本物の味が高い評価を受けるビン入りの低温殺菌牛乳が大人気を博しています。理念だけではなく、美味しい牛乳として市場からも評価を受け、事業としてもしっかりと成立させていることが驚きです。理想的な酪農と牛乳を実現し他産業からも視察が訪れる中洞牧場を訪れ、中洞さんの話をうかがいます。

**講師：中洞　正さん**

東京農業大学農学部卒業後、岩手県岩泉町で酪農を開始。24時間365日畜舎に牛を戻さない通年昼夜放牧酪農、牛乳プラントの設計、建築、乳製品の製造販売まで手掛ける中洞式山地酪農を確立した。中洞式山地酪農の普及を目指す株式会社山地酪農研究所 代表取締役。農業生産法人株式会社企業農業研究所 中洞牧場 牧場長。東京農業大学客員教授。

**課題書籍**

**『幸せな牛からおいしい牛乳』 著者：中洞正**
広い放牧地に解放され、自由に草を食べ、狂牛病とは無縁の牛たち。ホンモノの味が高い評価を受ける、ビン入りの低温殺菌牛乳。理想的な酪農と牛乳を実現し、他産業からも注目を集める男の熱いメッセージ。

【25】＜流通＞　現地視察：岩手県大槌町

## 流通革命　～生産者と消費者を繋げる、ポケットマルシェ～

開催日時：2018年9月17日(祝・月)

課題書籍：　『都市と地方をかきまぜる～「食べる通信」の奇跡～』

一次産業経営者にとって、対顧客意識を高め利益率を上げるためにも重要なのが、生産者から消費者への直接販売である。しかし個人で始める生産者にとっては、出品からはじまって、伝票作成、配送の手配、顧客管理、入金など一連の煩雑な業務をこなすことはハードルが高い。ポケットマルシェとはスマホ1つで、日本各地の農家さん漁師さんから直接旬の食べものを買える、全く新しい産直アプリ。生産者直送ならではの新鮮な野菜や魚介類を買えるだけでなく、生産者から採れたて・獲れたての商品情報をリアルに受信できる。本講座では、東日本大震災の被災地であり漁業が基幹産業である岩手県大槌町にて、ポケットマルシェを事例に都市と農山漁村を繋ぐ流通について考える。

**講師：高橋　博之さん**

株式会社ポケットマルシェ・代表取締役
一般社団法人 日本食べる通信リーグ・代表理事
特定非営利活動法人 東北開墾・代表理事

1974年、岩手県花巻市生まれ。2006年、岩手県議会議員補欠選挙に無所属で立候補、初当選。2期6年をつとめる。2011年の震災後、事業家へ転身。“世なおしは、食なおし。”のコンセプトのもと、2013年に特定非営利活動法人「東北開墾」を立ち上げ、史上初の食べ物つき情報誌『東北食べる通信』を創刊。その後一般社団法人「日本食べるリーグ」を創設し食べる通信を全国へ展開。すでに30以上の「食べる通信」が各地に誕生している。2016年には生産者と消費者を直接結びつけるサービス「ポケットマルシェ」をリリース。生産者と消費者が結びついた強い一次産業を目指している。

**課題書籍**

**『都市と地方をかきまぜる～「食べる通信」の奇跡～』**

【26】＜漁業＞　現地視察：宮城県気仙沼市

## 地球生態系循環　～森は海の恋人運動～

開催日時：2018年9月18日(火)

課題書籍：　『鉄は魔法使い』　『里海資本論：日本社会は「共生の原理」で動く』

持続可能な漁を続けていくためには、川でつながる上流の森が大事であると気づき、仲間とともに植林をはじめた漁師の畠山重篤さん。気仙沼で牡蠣の養殖を営み、被害を受けた3.11の大震災後もいち早く「海を信じる」と漁を再開しました。持続可能な里山里海の循環を形成するためにカギとなるのは豊かな森から育まれる鉄分です。鉄分を始めとするミネラルが川を通じて海に流れ込み豊かな漁場をつくります。まさに「森は海の恋人」です。畠山氏から自然界が織りなす芸術的な連携の仕組みを学びます。

**講師：畠山　重篤さん**

1943年中国上海生まれ。県立気仙沼水産高校を卒業後、家業の牡蠣養殖業を継ぐ。海の環境を守るには海に注ぐ川、さらにその上流の森を守ることの大切さに気付き、漁師仲間と共に「牡蠣の森を慕う会」を結成（2009年、NPO法人森は海の恋人を設立）。1989年より気仙沼湾に注ぐ大川上流部で、漁民による広葉樹の植林活動「森は海の恋人運動」を行っている。この活動は、小・中・高校の教科書にも紹介されている。東日本大震災で牡蠣養施設等の全て失うが、コンクリートの防潮堤に頼らず震災後の自然環境を活かした地域づくりを展開している。

朝日森林文化賞（1994年）、緑化推進功労者内閣総理大臣表彰（2003年）、宮沢賢二イーハトーブ賞受賞（2004年）、国連森林フォーラム（UNFF）「フォレスト・ヒーローズ」受賞（2012年）等。

【27】＜介護福祉＞

## 介護福祉の未来　～ぬくもりある最後を。ケアセンターやわらぎ～

開催日時：2018年9月30日(日)

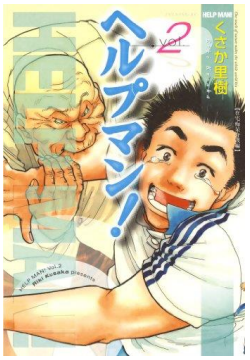
課題書籍：　『親が倒れた! 親の入院・介護ですぐやること・考えること・お金のこと』　『ヘルプマン　2巻』

誰もが親から生まれており、必ず親は先に老います。痴呆になることもあれば、介護が必要になることも多いでしょう。急速に進む高齢化社会で介護福祉業界について知らずにいてよいわけがありません。農山漁村に移住をした方が、親の介護のためにやはり都市へ戻るという例も多く聞きます。

介護福祉分野での起業家であり、そして社会起業家の母としても著名な講師の石川治江さんと、誰もが直面する「その時」に備えて、尊厳ある最後について考えます。

**講師：石川　治江さん**

社会福祉法人にんじんの会理事長、特定非営利活動法人ケア・センターやわらぎ代表理事、立教大学大学院２１世紀社会デザイン研究科客員教授、立川駅にエレベーター設置運動を開始（1981）、任意団体ケア・センターやわらぎ設立（1987）、「ケース管理業務支援情報システム」開発(1994)、社会福祉法人にんじんの会設立（1997）



【28】＜林業＞　現地視察：高知県佐川町

## 自伐型林業　～地方創生の切り札～

開催日時：2018年10月6日(土)

課題書籍：　『New自伐型林業のすすめ』

日本の国土の７割を森林が占めています。「地域創生」に取り組むならば、林業の再興、国産材の有効利用にこそ力を入れるべきです。「大規模・大量生産・集約・高投資・高コスト・委託/請負」型の林業が国策“森林・林業再生プラン”とされている一方で、土佐の森・救援隊は「小規模・少量多品目生産・分散・低投資・低コスト・自立」型の自伐林業を核とした『土佐の森方式』を確立し、地域に根ざした仕組みを展開しています。

大規模林業一辺倒では森林破壊や市場破壊が多発していますが、逆に、地域に根ざした自伐型林業『土佐の森方式』は、木質バイオマス利用のための林地残材収集や、地域林業再生、地域雇用、地域経済活性化、森林環境再生に大きく貢献し、林業市場を大きく拡大することも分かってきました。自伐型林業は森林再生や地域振興に大きく貢献します。この情報が全国に伝播し、導入地域はすでに40地域を越えようとし、さらに勢いを増しています。

牽引役の中嶋健造さんから日本の林業の問題点、自伐型林業の概要について学びます。また、自伐型林業を実践されている方の施業山林も見学します。

**講師：中嶋　健造さん**

NPO法人自伐型林業推進協会　代表理事
NPO法人土佐の森・救援隊　事務局長

昭和37年高知生まれ、高知県いの町在住。愛媛大学大学院農学研究科(生物資源学専攻)修了。IT会社、経営コンサルタント、自然環境コンサルタント会社を経てフリーに。平成15年、NPO法人土佐の森・救援隊設立に参画し、現在事務局長。

山の現場で自伐林業に驚き興味を持ち、地域に根ざした脱温暖化・環境共生型林業が自伐林業であることを確信し、「自伐林業+シンプルなバイオマス利用+地域通貨」を組み合わせた「土佐の森方式」を確立させ、真の森林・林業再生、山村再生、地域雇用拡大等のために、自伐林業及び土佐の森方式の全国普及にまい進している。主な著書に「バイオマス材収入から始める副業的自伐林業」全国林業改良普及協会。他、総務省「地域の元気創造有識者会議」委員など。

【29】＜木材加工＞　現地視察：高知県本山町

## 製材と木材加工　～レーザーカッターによる高付加価値商品の創出～

開催日時：2018年10月7日(日)

高知県本山町が誇る、木材加工ベンチャー企業のばうむ社。大手ブランドからも受注が相次いでおり、東急ハンズでもその商品が取り扱われています。なかでもレーザーカッターを活用した木材製品の評判が高く、その付加価値は、原木価格の150倍にまで上ります。
しかしながら、高知県嶺北地域は豊富な森林資源に恵まれているにも関わらず、木材価格の低迷によって十分な森林整備が行われていない現状があります。ばうむ社では、木材の利用を促進し、木材価格の向上を図ることで自社も、地域も、自然環境も守られる商売の確立を目指しているのです。本講座では、ばうむ社を訪問し、工場見学と木材加工業のポイントについて、代表の藤川さんにのお話を伺います。

**講師：藤川　豊文さん**

１９６４年４月２日生まれ
１９８３年　高知県立高知工業卒　横浜市の建設会社入社
１９９６年　本山町にＵターン　藤川工務店入社
２００４年　木部会「ばうむ」結成
２００８年　藤川工務店社長就任
２０１０年　ばうむ合同会社設立　代表社員就任
２０１２年　本山町商工会　副会長
２０１３年　本山町農業公社理事長
２０１６年　嶺北地域振興㈱ 社長

【30】＜サテライトオフィス＞　現地視察：徳島県美波町

## 地域に溶け込むサテライトオフィス
## ～日本一のサテライト出展企業数を誇る徳島県美波町あわえの取り組み～

開催日時：2018年10月8日（祝・月）

徳島県の小さな漁村である美波町は日本一のサテライトオフィス出展企業数（17 社）を誇る。都心から企業社員やデザイナーが移住し、祭りなどにも積極的に参加し地域に溶け込み、家族を作り増やしている。企業社員が出張時に家族で訪れ、子供を美波町の小学校に通わせる 「デュアルスクール」も実現。それらの仕掛けを成功させている地域活性会社「あわえ」の代表である吉田基晴代表の話をうかがい、美波町の取り組みから都市企業と農山漁村の幸福なコラボレーションを学ぼう。

**講師：吉田　基晴さん**

１９７１年徳島県海部群美波町生まれ。株式会社ジャストシステム、ベンチャー企業勤務を経て２００３年にサイファー・テック株式会社を設立。
２０１２年徳島県美波町にサテライトオフィス「美波Lab」を開設、２０１３年に本社を美波町に移転。
２０１３年６月、地方の暮らしの中で感じた地域課題をビジネスの力で解決したいという思いから、パブリックベンチャーの株式会社あわえを設立。同代表取締役。「日本の地方を元気にする」ことを目指し、サテライトオフィス誘致やベンチャー創業を軸とした地域振興事業に取り組む。美波町の地方創生政策参与も兼任。

【31】＜福祉と畜産加工＞　現地視察：千葉県香取市

## 畜産加工業と福祉　～福祉の六次産業化「恋する豚研究所」～

開催日時：2018年10月21日(日)

千葉県香取市を中心拠点とする社会福祉法人である福祉楽団は、特別養護老人ホームやデイサービス施設など6拠点をもち、障がい者雇用、社会福祉事業の一環として「恋する豚研究所」を運営されています。代表の飯田大輔さんは「ケア（福祉）の六次産業化」を唱え、障がい者の雇用を担う施設であることを売り出すことなく、デザインやマーケティングの力を駆使した独自ブランディングによる販路開拓をしています。

実際に「恋する豚研究所」を訪問し、代表の飯田大輔氏から畜産加工業の現状と課題、そして、福祉に様々な産業を結び付ける「ケア（福祉）の六次産業化」についてレクチャーいただき、議論します。

**講師：飯田　大輔さん**

1978年千葉県生まれ。東京農業大学農学部卒業。千葉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程修了。
2001年社会福祉法人福祉楽団設立。特別養護老人ホームの相談員、施設長等を経て、現在、理事長。
2012年株式会社恋する豚研究所設立。現在、代表取締役。
千葉大学福祉環境交流センター研究員、京都大学こころの未来研究センター連携研究員。

【32】<テクノロジーと哲学思想>　現地視察：北海道浦河町

## 伝統とテクノロジー　～継承すべきものと改革すべきものを考える、日本とはどんな国か？アイヌ文化・民藝からAI・仮想通貨まで～

開催日時：2018年11月4日(日)

課題書籍：『日本人の原点がわかる「国体」の授業 』『アイヌ学入門』『民藝とは何か』『人工知能と経済の未来：2030年雇用大崩壊』『お金2.0 新しい経済のルールと生き方』『日本再興戦略』

本講座は、地球のしごと大學のコアコンセプトである「日本の旧き良き技術や知恵、精神性を現代テクノロジーと融合させて未来のしごとに活かす」ために、受講生の皆さんと議論形式で進める講座です。
アイヌ歴史民俗博物館を訪問し日本の原住民族であるアイヌ文化について理解を深め、高浜大介から「日本的仕事観」についての紹介、そして課題書籍を読んだ受講生の感想をもとに伝統とテクノロジーについて熟議します。
なぜ旧きに立ち返り学ぶべき時代なのか？何を引継ぎ何を改革すべきなのか？そしてそれは現代社会でどう実生活に活かせるのか？答えを探すことは容易ではありませんが、受講生の皆さんとチャレンジしてみたいと思います。

**講師：高浜　大介**

株式会社アースカラー／地球のしごと大學　代表
農業生産法人「地球のしごと農園」代表

1979年生まれ。東京都墨田区出身。千葉県佐倉市在住。立教大学観光学部観光学科卒。大手国際物流企業勤務、企業人事・教育ベンチャー勤務を経て、持続可能な地域（大地）と共生する職業人「アースカラー」の育成・輩出事業を2010年から開始。地球のしごと大學の受講者は延べ300人以上。自らも千葉県佐倉市の里山に居住し、約1町歩の田畑にて企業研修・体験型農場を運営、無農薬・無化学肥料のお米作りや大豆作りも行っている。

【33】<障碍者福祉>　現地視察：北海道浦河町

## 多様性の尊重とは何か　～弱さから始まる仕事と社会、精神病でまちおこし～

開催日時：2018年11月5日(月)

課題書籍：『べてるの家の「当事者研究」』

浦河べてるの家は、精神障害をかかえた人たちの有限会社・社会福祉法人です。その特徴は、病気を治療し、社会復帰をめざすのではなく、悩み、弱さをそのまま受けいれ、問題だらけの人生を肯定する力の獲得をめざしていることです。日高昆布の通販からはじまり、農産物・海産物の事業も行っています。「べてるの家」は生活共同体、働く場としての共同体、ケアの共同体という３つの性格を有しており、１００名以上の当事者が地域で暮らしています。一億総活躍社会、社会的包摂（ソーシャル・インクルージョン）がキーワードになっています。当事者ミーティングを見学し、当事者の作業のお手伝いをさせて頂く中で、きれいごとではない社会的包摂の現場とその知見を学びましょう。

<べてるの家の理念>

・弱さを絆に　・三度の飯よりミーティング　・安心してサボれる職場づくり
・昆布も売ります病気も売ります　・精神病でまちおこし
・自分でつけよう自分の病気　・弱さの情報公開　・昇る人生から降りる人生へ　…etc

**浦河べてるの家**

べてるの家は、1984年に設立された北海道浦河町にある精神障害等をかかえた当事者の地域活動拠点です。
有限会社福祉 ショップべてる、社会福祉法人浦河べてるの家、NPO法人セルフサポートセンター浦河などの活動があり、総体として「べてる」と呼ばれています。
そこで暮らす当事者達にとっては、生活共同体、働く場としての共同体、ケアの共 同体という３つの性格を有しており、100名以上の当事者が地域で暮らしています。

【34】＜金融・投資＞　現地視察：未定

## お金の地産地消　～地域仮想通貨と循環型経済～

開催日時：2018年11月18日(日)

課題書籍：『はじめよう、お金の地産地消――地域の課題を「お金と人のエコシステム」で解決する』　『エンデの遺言「根源からお金を問うこと」』

**課題書籍**

**『はじめよう、お金の地産地消――地域の課題を「お金と人のエコシステム」で解決する』**
**著者：木村真樹**
「お金の流れ」が変われば、地域はもっと元気になる。子育て、介護、環境…地域づくりに取り組む人をみんなで応援する仕組みをつくろう。若者たちが始め、金融機関、自治体、企業、大学、そして多くの個人を巻き込んで広がる「地域のお金を地域で生かす」挑戦。

**『エンデの遺言「根源からお金を問うこと」』 著者：河邑 厚徳、グループ現代**
現代のお金に関する常識を破る思想を紹介。事例や寓話を交えながら,「暴走するお金」の正体を探る「パン屋でパンを買う購入代金としてのお金と,株式取引所で扱われる資本としてのお金は,まったく異なった種類のお金である」。こう語りかける本書は,NHKで放送されたドキュメンタリー「エンデの遺言−根源からお金を問う」を1冊の本にまとめたものだ。
ドイツの作家であるエンデ(故人)は,「個人の価値観から世界像まで,経済活動と結びつかないものはない。問題の根源はお金にある」と提起する。エンデへの取材をもとに,彼の蔵書,貨幣社会の歴史を紹介しながら,現代の金融システムが引き起こす弊害に警鐘を鳴らすのが本書の目的だ。
本書では,事例や寓話を取り上げて,貨幣経済の仕組みと問題点を分かりやすく説明している。

【35】＜ライフキャリア＞

## 家族について　～映画「うまれる」・「いのちのはじまり　子育てが未来をつくる」鑑賞を通して～

開催日時：2018年11月25日(日)9:30~12:30

課題書籍：『うまれる　かえがえのないあなたへ』

映画「うまれる」と「いのちのはじまり　子育てが未来をつくる」を鑑賞し、家族とは？子孫を残すとは？男性の育児など、持続可能な社会を創る上で必須の次世代を生み育てるということについて考えます。

**映画「うまれる」**
「子供は親を選んで生まれてくる」という胎内記憶をモチーフに、命を見つめる4組の夫婦の物語を通して、【自分たちが生まれてきた意味や家族の絆、命の大切さ、人との繋がりを考える、ドキュメンタリー映画】。妊娠・出産・育児、流産・死産、不妊、障害など『うまれる』ということを幅広く捉える事で、親子関係やパートナーシップ、男性の役割、そして『生きる』という事を考える・感じる内容。

**映画「いのちのはじまり」**
世界には、いろんな育児のかたちがある。
子供の成長に本当に必要なものとは？
本作は、世界９カ国で家族や育児現場を取材し、さまざまな文化・民族・社会的背景における子育ての今を伝えます。さらに、早期幼児教育の専門家たちへのインタビューを織り交ぜながら、親をはじめ子育てに関わる周囲の大人たちが、安心して育児に取り組めるような公共政策の必要性を訴えます。

【36】<ライフキャリア>

## これからのライフ・キャリアデザイン
## ～個別相談と卒業制作書き方レクチャー～

開催日時：2018年11月25日(日)

課題書籍：『次の時代を、先に生きる。 – まだ成長しなければ、ダメだと思っている君へ』

卒業を前に、1年間の学びをまとめる卒業制作の書き方レクチャーを行います。また、移住を考える方、起業を考える方、転職を考える方、それぞれにキャリアデザイン対する全体アドバイスを行います。特に起業を考える方には個別相談にも応じます。

**課題書籍**
**『次の時代を、先に生きる。 – まだ成長しなければ、ダメだと思っている君へ』**

著者：高坂勝
雇われ人生から、仕事を創る側へ。都会の脇役より、地方の主役へ。ただの消費者からクリエイターへ。常識から抜け出せば、すべては選択できる。人生と経済の、新しい教科書。

## 卒業式
## 卒業制作プレゼンテーション　&　卒業パーティ

開催日時：2018年12月9日(日)

卒業制作を事前提出いただき、一人10分程度の持ち時間で1年間のまとめとこれからのライフ・キャリアプランを発表します。

終了後は卒業パーティを行い、1年間の教養学部総括となります。